

浜松城跡16

Hamamatsu Castle  
The 40<sup>th</sup> excavation report

浜松市教育委員会

2022年3月

Hamamatsu Municipal Board of Education, March 2022





# 浜松城跡 16

Hamamatsu Castle 40<sup>th</sup> Excavation report

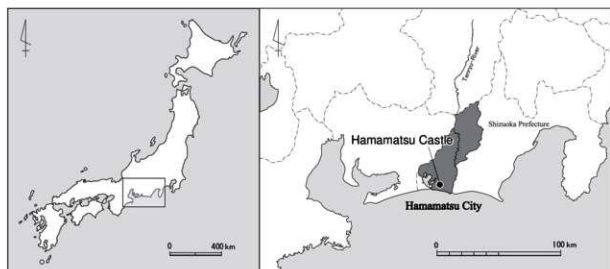
Hamamatsu Municipal Board of Education

2022



## 例 言

- 1 本書は浜松市中区元目町における浜松城跡40次発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社穴吹工務店静岡支店の集合住宅建設に先立ち実施した。現地発掘調査及び資料整理・報告書刊行作業は、株式会社穴吹工務店静岡支店から依頼を受けた浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。調査にかかわる費用は、株式会社穴吹工務店静岡支店が負担した。
- 3 発掘調査にかかわる面積と期間は以下の通りである。  
調査面積 約 248 m<sup>2</sup>  
現地調査 令和2年9月1日～令和2年9月23日  
整理期間 令和2年9月24日～令和4年3月18日
- 4 現地発掘調査作業及び整理作業・報告書刊行作業は、和田達也（浜松市文化財課）が実施し、北澤志織、岡本佳枝、深見亜衣子（浜松市文化財課）が補佐した。
- 5 本書の執筆及び写真撮影は和田が行った。なお、第3章の分析は、株式会社吉田生物研究所の分析成果報告書をもとに和田が加筆・再構成した。
- 6 調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、浜松市文化財課が保管している。



## 凡 例

- 1 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 遺物番号は遺物の種別にかかわらずなく、連番を付した。
- 3 土層・土器の色調は、『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
- 4 本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りとする。

□ 土師質土器    ■ 陶器

- 5 本文中の引用文献等の表記は以下のように示す。

（財）浜松市文化振興財団→浜文振

教育委員会→教委

浜松市博物館→浜市博

# 浜松城跡 16

## 目次

例言

凡例

第1章 序論	1
1 調査・報告に至る経緯	1
2 浜松城跡をめぐる環境	2
3 浜松城跡の調査履歴	7
4 確認調査の成果	10
5 調査の方法と経過	12
第2章 調査成果	13
1 40次調査の概要	13
2 基本層位	13
3 検出遺構	13
4 出土遺物	14
5 小結	14
第3章 分析	19
1 分析の概要	19
2 出土木製品及び出土漆器の樹種同定	19
3 漆塗膜構造の調査	23
第4章 総括	24

図版

## 図 版 目 次

1	40次調査区2 全景（北東から）
2	1 調査区1 完掘状況（南西から）
	2 調査区1 完掘状況（北西から）
	3 調査区1 木杭列（SX01）検出状況（南東から）
	4 調査区2 完掘状況（北西から）
3	1 調査区2 完掘状況（南東から）
	2 調査区2 SD01 南壁土層堆積状況（北北東から）
4	主要出土遺物
5	主要出土木製品・漆器
6	1 かわらけ
	2 土師質土器
	3 陶器・匣鉢
	4 播鉢
	5 平瓦
7	1 曲物側板（15）・曲物底板（16）
	2 曲物底板（16）加工痕跡
	3 曲物底板（16）内面漆塗膜構造
	4 曲物底板（17）
	5 曲物底板（18）
8	1 漆器碗（19）
	2 漆器碗（19）漆塗膜構造
	3 漆器碗（20）
	4 漆器碗（20）漆塗膜構造

## 挿図目次

Fig.1	浜松城跡の位置	1	Fig.11	SD01 土層断面図	15
Fig.2	浜松城とその周辺の地形	2	Fig.12	SX01 の詳細	16
Fig.3	近世浜松城の範囲と構造	3	Fig.13	40次調査出土遺物	18
Fig.4	浜松城と浜松城跡のできごと	5	Fig.14	出土木製品の顕微鏡写真（1）	20
Fig.5	近世浜松城と城下町の構造	6	Fig.15	出土木製品の顕微鏡写真（2）	21
Fig.6	浜松城跡の調査履歴	8	Fig.16	出土漆器の顕微鏡写真	22
Fig.7	29次調査区配置図	10	Fig.17	クリ蒔地の断面構造	23
Fig.8	29次調査の成果	11	Fig.18	ケヤキ蒔地の断面構造	23
Fig.9	40次調査区の配置	12	Fig.19	古城の調査成果	24
Fig.10	検出遺構	14			

## 挿表目次

Tab.1	浜松城跡における調査履歴	9
-------	--------------	---



# 第1章 序論

## 1 調査・報告に至る経緯

**遺跡の概要** 静岡県浜松市中区に所在する浜松城跡は、天守曲輪とその周辺が浜松市の史跡に指定され保護されている。昭和25年(1950)に、浜松城公園として整備され、昭和33年(1958)に復興天守閣が建設された。浜松城跡の中核部は現在、浜松城が持つ歴史情報を活かした都市公園を目指し整備が進められている。いっぽう、浜松城の二の丸や三の丸は明治6年(1872)の廃城以降、市街地化が進み、城郭の景観は失われているが、開発を免れた浜松城の痕跡は地下に埋もれている。

**開発計画の浮上** 対象地において、株式会社穴吹工務店静岡支店により集合住宅建設が計画されたため、令和元年(2019)10月28日に遺跡の有無や内容を把握するための確認調査(29次調査)を実施した。確認調査の結果、対象地東側を中心として浜松城跡東外堀にあたる堀跡を検出し、開発予定地内に浜松城跡の堀跡が残存することが明らかになった。

**本発掘調査の実施** 29次調査の結果を踏まえ株式会社穴吹工務店静岡支店と浜松市教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議を行った。開発予定地のうち、開発に伴う掘削深度が深く遺跡の保護が図れない部分において発掘調査を行うことを決定した。

現地発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業は、浜松市教育委員会(浜松市文化財課が補助執行)が実施した。調査面積は248㎡である。

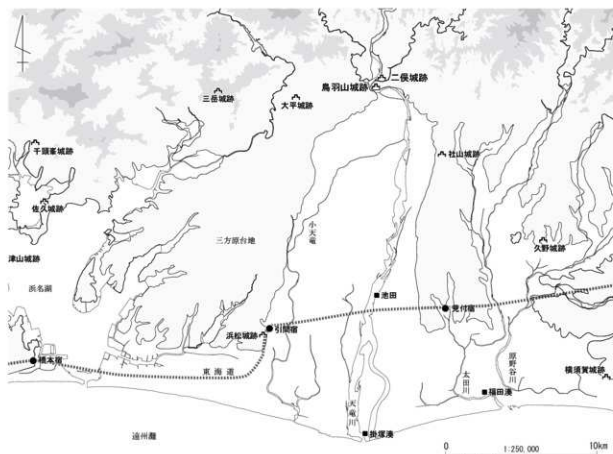


Fig.1 浜松城跡の位置

## 2 浜松城跡をめぐる環境

### (1) 地理的環境

浜松城跡は三方原台地の東縁部に立地し、台地の東側を流れる馬込川や天竜川によって形成された河岸段丘の地形を活かして築かれた中世から近世にかけて地域の中核を担った城郭である。江戸時代に城域が最大となり、東西 600 m、南北 650 m の範囲となった。浜松城は三方原台地東辺の解析谷に囲まれた段丘頂部に天守曲輪を配置し、河岸段丘の地形を活かし、階段状に高位面から低位面に向けて、本丸、二の丸、三の丸が配置されている。また、城郭の周囲には東海道などの主要な街道沿いに城下町が展開し、現在の浜松市街地の基礎になった。

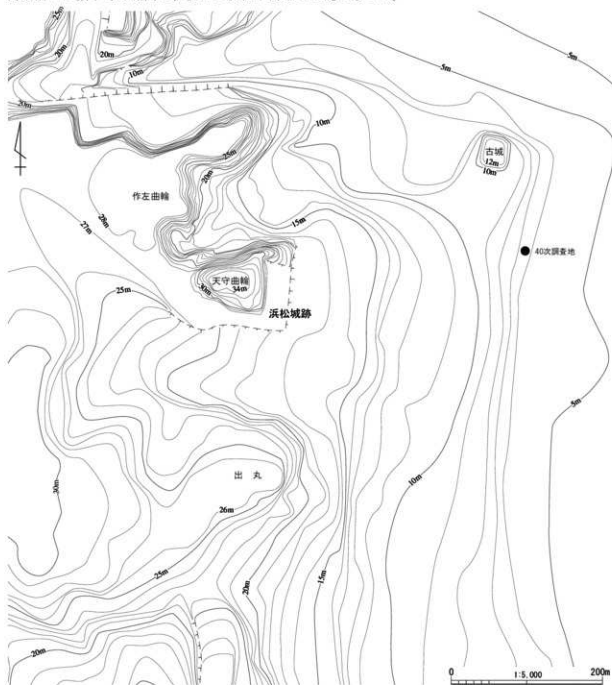


Fig.2 浜松城とその周辺の地形

## (2) 歴史的環境

**概要** 浜松城が所在する静岡県西部地方（遠江）には、戦国時代の城郭が数多く分布している。戦国時代の遠江は、今川氏、徳川氏、武田氏が領有をめぐり争った地域であり、浜松城もその舞台のひとつである。引間城の時期を含む浜松城と浜松城周辺の動向は、時代や城主の変化などをもとに第1段階：戦国時代前半（今川領有期もしくはそれ以前）、第2段階：戦国時代後半（徳川氏領有期：1570～1590）、第3段階：安土桃山時代（堀尾氏領有期：1590～1600）、第4段階：江戸時代（譜代大名領有期：1603～1868）、第5段階：近代（1868～1945）、第6段階：現代（1945～現在）の6段階に整理されており（鈴木 2021）、変遷や時代的な特徴を捉える上で有効である。なお、本報告では、城郭として利用されるよりも前の状況については、第0段階として記載する。

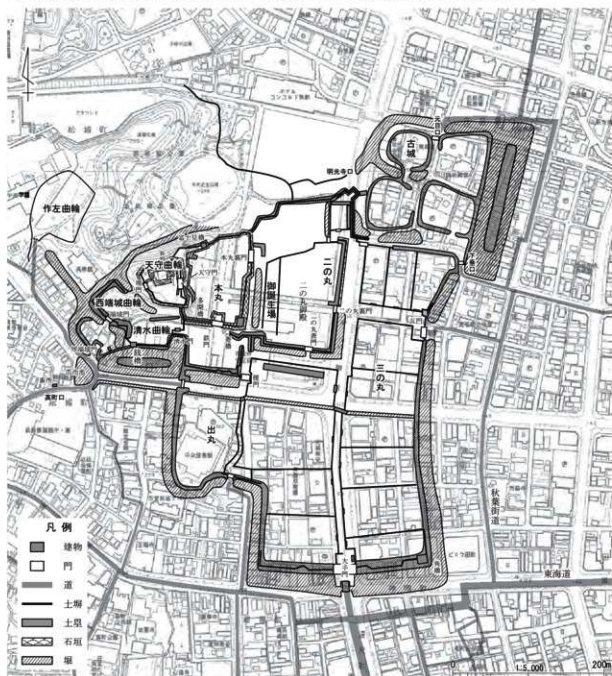


Fig.3 近世浜松城の範囲と構造

**第0段階** 第0段階は、引間城の時期を含む浜松城が築城されるよりも前の古墳や古代の集落として使用されていた期間である。浜松城中枢部と谷を挟んで北側に位置する作左山の南向き斜面には7世紀の横穴墓である作左山横穴が存在する(向坂1976)。また、浜松城内で実施した発掘調査では古墳時代の須恵器や土師器が一定量出土しており、古墳群の存在が推定できる。浜松城跡三の丸を対象に実施した27次調査(浜松市教委2022a)や浜松城下町遺跡で実施している発掘調査(浜松市教委2017等)では、須恵器や土師器が一定量出土し、古代の遺構も確認されていることから、古代には集落が造営されたことが明らかである。

**第1段階** 第1段階は、浜松城の前身城郭である引間城を地域拠点とし吉良氏や今川氏が浜松とその周辺を領有した段階である。引間城は、中世都市「ひくま」の西側にある丘陵上に築かれた。築城時期や築城時の城主は不明確であるが、『宗長手記』によると浜松庄の領主であった吉良氏の代官であった巨海新左衛門尉が15世紀後半頃に築城したとされる。16世紀前半には今川氏配下の飯尾氏が3代にわたり城主を勤めた。

引間城は江戸時代の浜松城を描いた絵図に見られる「古城」と記載された部分にあたり、土塁と堀に囲まれた4つの正方形の曲輪によって構成されていたことがうかがえる。現在の元城町東照宮とその周辺の150m四方程度の範囲が絵図で古城と表記された部分に当たり、地形から形状をうかがい知ることができる。現在、元城町東照宮が鎮座する北西の曲輪では、16世紀代を中心とした時期のかわらけが多数出土しており、饗応などが行われた中心的かつ儀礼的な空間であったと想定できる。今川氏領有期や徳川氏領有期に城郭の一部として機能していたことが明らかである。

**第2段階** 第2段階は、徳川家康が元亀元年(1570)に引間城に入城し、浜松城への改称や城郭の整備を行った段階である。永禄3年(1560)の桶狭間の戦いで今川義元が織田信長に敗れると、今川勢力は急激に衰退した。永禄8年(1565)、引間城を拠点とした飯尾連龍が松平元康(後の徳川家康)との内通の疑いにより今川氏真により殺害されるなど、大きな混乱が発生した。永禄11年(1568)、徳川家康は武田玄直の駿河侵攻に呼応し、遠江へと侵攻し、元亀元年(1570)、岡崎城から引間城へと拠点を移した。徳川家康は、引間城を北東の起点として西側の丘陵へと城郭を拡張し、浜松城と改称した。元亀3年(1572)の三方ヶ原の戦いをはじめとした武田勢力との軍事衝突に備え、徳川家康が、浜松城をたびたび改築した記録がみられる。また、城郭の改築にあたり城内にあった寺社の移転を示す記録がみられ、城域がうかがえる。徳川家康在城期における浜松城の具体像は明らかではないが、これまでの発掘調査成果や古文書等から、江戸時代の天守曲輪・本丸・二の丸・古城・西端城曲輪・出丸・作左曲輪・三の丸の一部を中心とした範囲とみられる。

発掘調査では、引間城のかわらけ集積(浜松市教委2016b)のほか、御誕生場の井戸(浜文振2012b)、や本丸南側で検出された堀跡(浜松市教委2015b)といった徳川家康領有期の遺構が検出されている。

**第3段階** 第3段階は、堀尾氏領有期(1590～1600)である。徳川家康の関東移封に伴い、東海の諸城には豊臣系大名が配置され、浜松城に堀尾吉晴が入った段階から関ヶ原の戦いを経て堀尾氏が出雲に移封されるまでの10年間である。堀尾吉晴は、浜松城において高石垣の構築や瓦葺き建物の建築を行い、織豊系城郭へと改築した。最高所には石塁で囲まれた天守曲輪を築き、天守曲輪の中には天守台が構築されている。門は西側に搦手を設定し、東側には天守曲輪の大手にあたる天守門を設定している。天守を描いた絵図は見られず、詳細は不明であるが天守台から鯉瓦をはじめとした瓦が採集されていることや穴蔵に井戸を備えていることから堀尾氏に在城期には天守が建てられていたとみられる。

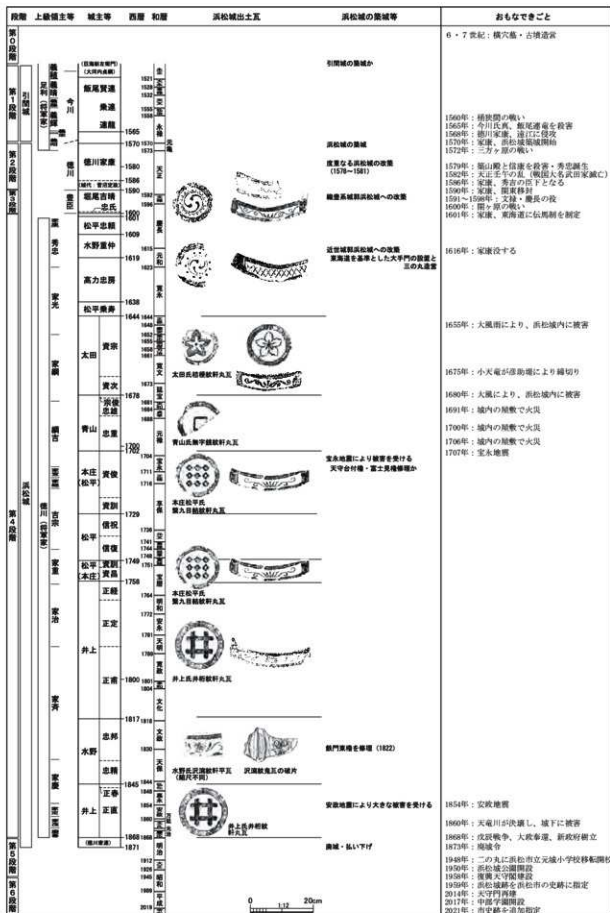


Fig.4 浜松城と浜松城跡のできごと

江戸時代の絵図に描かれた天守曲輪内の建物は天守門と埋門に限られているが、発掘調査により天守曲輪の南東隅に櫓が存在した可能性が高いことが明らかになっている（浜松市教委 2019）。堀尾氏が在城期の浜松城においては、天守曲輪を中心に江戸時代の絵図に描かれた浜松城とは異なる城郭景観が広がっていたことが明らかになった。

標高が高い東の丘陵部から西の平野に向かい、天守曲輪から本丸、二の丸、三の丸へと地形を活かして曲輪が配置されている。浜松城の東側に位置した引間宿や引間宿から西へ向かう街道からの景観を意識して築かれた東向きの城郭と捉えられる。

**第4段階** 第4段階は、江戸時代を迎え徳川譜代大名が浜松城主を務めた段階である。江戸時代の浜松城主は譜代大名の十家二十二代を数えた。歴代の城主により城域の拡大や改修が行われた。天守曲輪や二の丸、三の丸南端で実施した発掘調査から、天守曲輪内における2m程度の埋め立てや建物の整理（浜松市教委 2019）、二の丸御殿の建設（浜松市教委 2022c）、三の丸の拡張（浜松市教委 2021b）などが、江戸時代の早い段階で行われた可能性が高い。江戸時代になり、城郭の役割が軍事拠点から政務空間へと変化し、天守曲輪をはじめとした軍事的な機能に重きを置いた天守曲輪などの中枢部は象徴的な空間へ変化したと捉えられる。天守門が近世浜松城の最高所に位置する

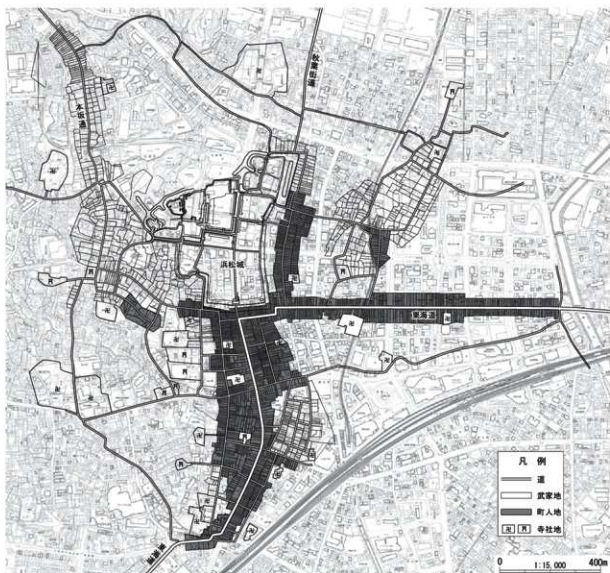


Fig.5 近世浜松城と城下町の構造

天守曲輪の建造物といえ、江戸時代を通して浜松城を代表とする建物であったことがうかがえる。

**第5段階** 第5段階は、明治時代から昭和20年(1945)の太平洋戦争終戦までの時期である。明治6年(1872)のいわゆる「廃城令」に先立ち、明治5年(1871)から浜松城の建物や土地の払い下げが進められた。このころに浜松城の建造物はすべて失われた。二の丸や三の丸は民有地化とともに大規模な開発が行われて市街地化し城郭景観が潜在化した。高台にあり大規模な石垣を備えた天守曲輪や本丸の一部は大規模な開発を免れ、天守曲輪は展望台に茶店が付属する民有の遊興施設として利用され、本丸は寺や学校用地として使用された。いっぽうで、旧幕臣により徳川家康にまつわる聖地として引間城跡(古城)や二の丸跡地へ徳川家康を祭神とする東照宮の勧進や、家康が鎧を掛けたとの伝承をもつ本丸南側の松(鎧掛けの松)の保護などの顕彰活動が行われた。

アジア太平洋戦争時には軍需工場等に加え市街地も空襲の標的となり、昭和20年6月の浜松大空襲によって、市街地の木造建築のほとんどが失われた。

**第6段階** 第6段階は、アジア太平洋戦争の終戦から現在に至る期間である。昭和25年(1950)に浜松城跡を会場として開催された「浜松子ども博覧会」を契機に周辺の土地の公有地化が進められ、同年に浜松城公園が開設された。昭和31年(1956)には天守曲輪と周辺の土地を公有地化され、天守台の上には昭和33年(1958)には復興天守閣が建設された。天守閣が再建された翌年の昭和34年(1959)には浜松市指定文化財の第1号として浜松城跡が浜松市の史跡に指定された。

昭和20年代から昭和30年代にかけての戦後復興期を中心に浜松城跡とその周辺には市庁舎や学校、水泳場、体育館、動物園、図書館、美術館などが次々に建設され、公共施設が集中する地区となった。市域の拡大と高度経済成長期の終焉とともに、水泳場の閉鎖や動物園や体育館、小学校などの施設が移転したことを契機として、浜松城の歴史資源を活かした整備が計画・実施されている。なお、浜松城跡に関わる発掘調査は平成21年(2009)の4次調査(天守門再建に伴う確認調査)から本格化し、令和4年(2022)1月現在、43回を数える。三の丸等、近代以降に市街地化した範囲においても地中には浜松城に関わる歴史情報が埋もれていることが明らかになるなど、物理的な歴史情報の蓄積と精度の向上が進んでいる。

### 3 浜松城跡の調査履歴

**概要** 浜松城跡では令和4年(2022)1月までに市史跡内と周辺の埋蔵文化財包蔵地内を合わせて43度にわたる発掘調査が実施されている。調査対象地は、市史跡の指定範囲とその周辺にあたる天守曲輪や本丸、二の丸といった浜松城中枢部の整備等に先立つ行政目的の発掘調査に加え、近年では、市街地が進んでいた三の丸における民間事業等に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査も実施し、浜松城の規模や構造が明らかになりつつある。

**中枢部の調査** 浜松城の天守曲輪・本丸・二の丸・西端城曲輪等を中枢部とする。中枢部における調査は、都市公園浜松城公園の整備に関わる調査や市役所庁舎建築に関わる調査、浜松城公園歴史ゾーンの天守曲輪や天守門、富士見櫓を中心とした整備に関わる保存目的の調査、浜松城公園長期整備構想推進事業に関わる旧元城小学校跡地の確認調査が行われ、調査成果が蓄積されている。

**三の丸等の調査** 平成27年(2015)以降、三の丸のように市街地化した地点においても浜松城の痕跡が確認できる部分があることが明らかになった。令和元年度に三の丸地区を対象に実施した27次調査では、近世浜松城において、古城と呼ばれた範囲を囲む堀に加え、絵図に表現されない古い時期の堀をはじめ、浜松城築城よりも古い時期の遺構が数多く検出されている(浜松市教委



2022a)。また、令和2年には、本書で報告する29・40次調査において浜松城の東外堀を検出したほか、大手門推定地の西側で実施した33・34次調査(浜松市教委2021b)において浜松城の南外堀を検出し、発掘調査成果をもとに浜松城南側の範囲を確定できるようになった意義は大きい。

**引間城・古城の調査成果** 引間城や古城を対象とした調査は、現在元城町東照宮が鎮座する北西隅の曲輪を中心に実施されている。11次調査により、戦国時代にさかのぼる時期に構築された土塁を確認したことや戦国時代のかかわりが大量に出土したことから、江戸時代に古城と呼ばれた地点に戦国時代の城郭が存在することが明らかになった(浜松市教委2016b)。また、41次調査によって南東の曲輪付近にも堀跡が埋没しており、大量のかかわり埋没していることが明らかになった。本報告の40次調査の成果も踏まえると、古城の範囲においても三の丸等と同様に市街地化が進んでいるが、地中には引間城の時代を含めた浜松城に関わる歴史情報が広範囲にわたり良好な状態で埋没していると推定できる。

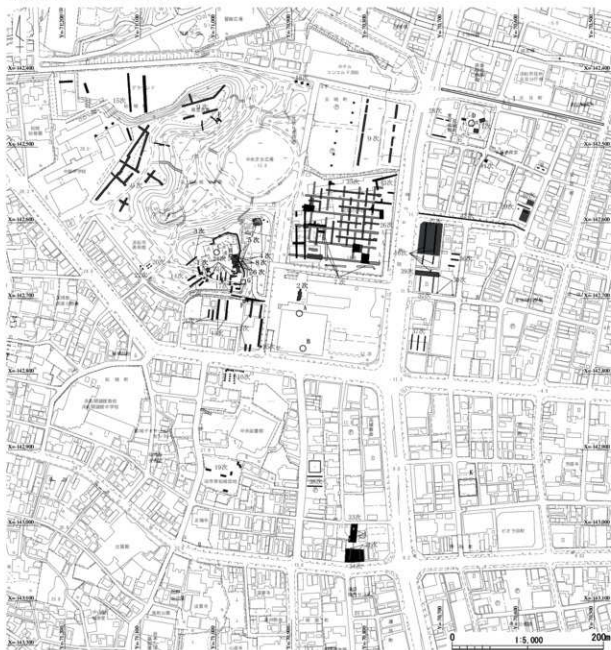


Fig.6 浜松城跡の調査履歴



Tab.1 浜松城跡における調査履歴

## 発掘調査年

回数	年次	調査事由	成果等	文献
1次	1960年	浜松市工高による確認調査		浜松市教委 1996
2次	1979年	市役所地下駐車庫整備に伴う工事立会	工事中に石版が見えられ、測量等を実施	浜松市教委 1996
3次	1984年	電線地中化工事に伴う工事立会	天守曲輪周辺の調査で、未知の石版等を確認	浜松市教委 1984 浜松市教委 1996
4次	2009年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓の基礎等を確認	浜松市教委 2010
5次	2010年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓の基礎調査で、天守門礎部の基礎構造と考えられる根石等を確認	浜松市教委 2011
6次	2011年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門跡の確認調査で、櫓石根石の高込石等を確認	浜松市教委 2012a
7次	2011年	セントラルパーク建設予定に伴う確認調査	二の丸・御園生堀の確認調査で井戸等を確認	浜松市教委 2012b
8次	2012年	天守門復元工事に伴う確認調査	天守門に付随する瓦堀り排水設備の全体像を確認	浜松市教委 2013a
9次	2012年	セントラルパーク建設予定に伴う確認調査	作左曲輪等の確認調査で、柱穴等を確認	浜松市教委 2013b
10次	2014年	市役所駐車庫整備に伴う本発掘調査	遺構等を確認	浜松市教委 2015b
11次	2014年	遺構保存状況把握のための確認調査	引開城跡(古堀)の確認調査で、土塁を確認。かわらけが多数出土	浜松市教委 2016b
12次	2014年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側石版、天守曲輪南側の空堀跡と西階城曲輪、本丸西側土塁と登り階を確認	浜松市教委 2015b
13次	2015年	市役所駐車庫整備に伴う確認調査	12次調査で確認したものと同一の可能性のある大型礎を確認	浜松市教委 2016a
14次	2015年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側石版、天守曲輪南側の空堀跡と西階城曲輪、本丸西側土塁と登り階を確認	浜松市教委 2016a
15次	2015年	学校建設に伴う確認調査	浜松城跡の範囲内であるが、城郭に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2016a
16次	2015年	社屋建設に伴う確認調査	三の丸跡に係る遺構は未確認であるが、城郭範囲以前の遺構と遺物を確認	浜松市教委 2017
17次	2015年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守曲輪南側土塁の状況確認、土塁内側石版基、曲輪内整備中の状況を確認	浜松市教委 2018a
18次	2015年	道路拡張に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2017
19次	2016年	用地売買に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2017
20次	2015年	美術館施設建設に伴う確認調査	壁とみられる落ち込みを確認	浜松市教委 2018b
21次	2015年	個人住宅建設に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2018b
22次	2015年	美術館施設建設に伴う確認調査	20次調査で確認したものと同一の可能性のある礎跡を確認	浜松市教委 2018b
23次	2018年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	富士見櫓跡周辺で残存状況の良い石版を確認。天守御池において、高さ2m以上の石版の埋没状況と瓦堀跡を確認	浜松市教委 2018a
24次	2018年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守御池内に、櫓と考えられる基礎と瓦堀りを確認	浜松市教委 2019
25次	2018年	水道管敷設に伴う工事立会	遺構～近代の土坑・小穴・礎等を確認	浜松市教委 2019
26次	2019年	浜松城公園長期整備構想に関わる確認調査	浜松城の本丸調査を前、二の丸の構造を確認	浜松市教委 2020
27次	2019年	社屋建設に伴う本発掘調査	引開城に関連する礎を確認	浜松市教委 2022a
28次	2019年	事務所増設に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2021a
29次	2019年	集合住宅建設に伴う確認調査	下巻口北側の礎を確認(40次調査の確認調査)	浜松市教委 2021a、本報告
30次	2019年	社屋建設に伴う確認調査	遺構は確認されなかったが、目録等の残存を確認	浜松市教委 2021a
31次	2019年	集合住宅建設に伴う確認調査	大千守西側の礎跡を確認(34次調査の確認調査)	浜松市教委 2021b
32次	2019年	社屋建設に伴う確認調査	残存建物によって、遺跡の大半は消滅	浜松市教委 2021a
33次	2020年	集合住宅建設に伴う本発掘調査	近世～近代の土坑・小穴・礎等を確認	浜松市教委 2021b
34次	2020年	集合住宅建設に伴う本発掘調査	大千守西側より、櫓南側礎跡と部分的な瓦堀跡を確認。近世瓦粉砕の製の礎跡が判明、室柱瓦が出土した	浜松市教委 2021b
35次	2020年	浜松城公園長期整備構想に関わる確認調査	浜松城の本丸、御園生堀、二の丸の構造を確認(26次調査から継続)	浜松市教委 2021c
36次	2020年	社屋建設に伴う確認調査	三の丸において戦国時代～江戸時代の遺物を確認	浜松市教委 2022b
37次	2020年	留置施設建設に伴う確認調査	三の丸において遺構や井戸のほか、多数の小穴を掘出	浜松市教委 2022b
38次	2020年	遺構保存状況把握のための確認調査	三の丸西側の礎を確認	浜松市教委 2022b
39次	2020年	社屋建設に伴う本発掘調査	浜松城二の丸の遺構や引開城に関連する礎を確認	浜松市教委 2022a
40次	2020年	集合住宅建設に伴う本発掘調査	下巻口北側の礎を確認	本報告
41次	2020年	駐車場造成に伴う工事立会	引開城(古堀)に関連する礎を確認	2022年度報告予定
42次	2020年	水道工事に伴う工事立会	引開城南側での立会	2022年度報告予定
43次	2021年	浜松城公園長期整備構想に関わる確認調査	本丸北東側石版・二の丸御園・組間を確認(26次・35次から継続)	浜松市教委 2022c

## 工事立会等(主要なもの)

記号	年次	事由	成果等	文献
A	1914年	中塚建立工事	瓦器遺出土	静岡県 1930、 浜松市教委 1996
B	1957年	市役所庁舎建設	瓦器遺出土	浜松市教委 1996
C	1958年	復興天守建設	天守台で井戸跡を確認	浜松市教委 1996
D	1960年	元城町東町宮社敷建設	境内より陶器等が出土	浜松市教委 1996
E	1964年	動物園内施設整備	作左曲輪を確認	岡崎 1976、浜松市教委 1996
F	1985年	駐車場整理工事	本丸南側石版を確認	浜松市教委 1996
G	1993年	天守曲輪石版解体修理	天守台付櫓の改修や天守曲輪南東部の石版の構造を確認	浜松市教委 1996
H	2012年	天守曲輪とカシ改修	瓦が出土	浜松市教委 2013c
I	2012年	水道工事	引開城	浜松市教委 2014
J	2013年	市役所南側解体工事	出丸から三の丸にかけての礎を確認	浜松市教委 2015a
K	2014年	集合住宅建設	三の丸東側の礎を確認	浜松市教委 2016c
L	2019年	残存建物解体工事	小穴を確認し、瓦が出土(33次調査対象地)	浜松市教委 2021b
M	2021年	残存建物解体工事	瓦器類を確認、浜松城東側の位置を特定する情報を取得	浜松市教委 2022b

## 4 確認調査の成果

### (1) 確認調査の概要

浜松城跡40次調査に先立つ確認調査は令和元年(2019)10月28日に実施した。29次調査の対象面積は約1,300㎡である。対象地内に東西方向の調査溝を2条設定し確認調査を実施した。調査面積は27㎡である。

### (2) 基本層位

29次調査では、2条の調査溝を設定し調査を行った。確認した土層堆積状況は、いずれの調査溝でも類似しており、地表から、Ⅰ層：碎石・造成土、Ⅱ層：近代から現代の暗褐色系の土や砂礫を主体とする土層、Ⅲ層：基盤層である。なお、堀の外側の平坦面には遺構や遺物が全く認められず、基盤層直上まで攪乱が及んでいる。堀跡の検出面は基盤層直上である。

### (3) 検出遺構

**堀跡** 29次調査において調査溝1・2の東側で堀跡を検出した。堀の幅は西側の肩部が対象地外にあるため不明確だが、検出面からの深さは2.1mである。堀の斜面は調査溝1では階段状になっており、調査溝2では30度程度と緩やかである。

**埋土** 堀跡の埋土は、大きく上下の2層に分けてとらえることができる。上位埋土は、基盤層由来の礫土や砂質土と灰色粘土の混層である。廃城後に行われた堀跡の埋め立て土と捉えられる。下位埋土は粘土や粘質土であり、堀として機能した段階での自然堆積層と捉えられる。出土遺物はいずれも下位埋土から出土したものである。

### (4) 出土遺物

**土師質土器** 土師質土器はかわらけと内耳鍋が出土した。1の手づくね成形のかわらけである。口径10.2cm、器高2.1cmである。口縁部外面は指頭痕が残り、口縁部内面には板ナデ調整がみられる。口縁部内面は強いナデによる面取り状の内傾面がみられる。胎土はきめ細かく、灰白色に焼成されている。2～4はロクロ成形のかわらけである。ロクロ成形のかわらけはいずれも砂質の胎土が用いられ、橙色に焼成されている。底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。2は、口径11.7cm、器高2.6cm、底径7.2cmである。底部外面にはススが付着しており、燈明具に用いられたとみられる。3は底径6.0cm、4は底径6.2cmである。

5・6は半球形内耳鍋である。いずれも小片であるが、口縁端部を丸く整え、外面にはススが付着している。5は口径28.0cm、6は口径24.0cmに復元できる。17世紀代のものと捉えられる。



Fig.7 29次調査区配置図

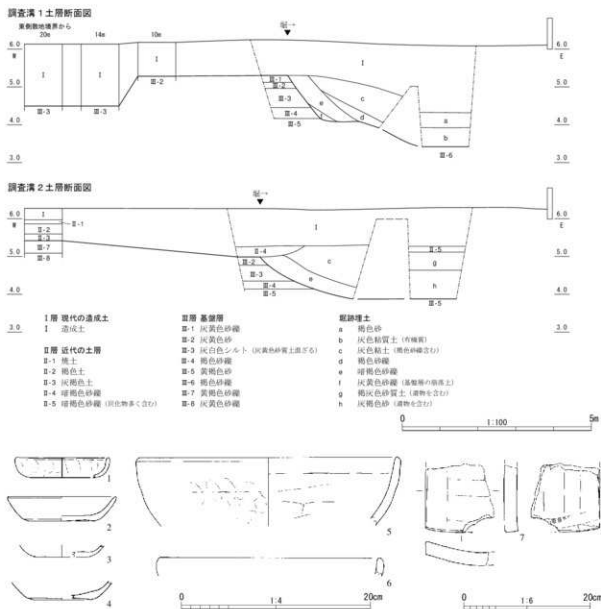


Fig.8 29次調査の成果

**瓦** 瓦は平瓦が1点出土した。出土した平瓦の残存部位は広端面と捉えられる。陶質に焼成され、色調は灰色である。広端面の凸面側には幅の狭い均等面取りがみられ、凸面には離れ砂が多く付着している。これらの特徴から17世紀代を中心とした時期に生産されたものと捉えられる。

#### (5) 小 結

29次調査対象地のうち、東側において戦国時代から江戸時代にかけて機能した堀を検出した。この堀跡は、東側肩部が対象地外にあり、規模は明らかでないが、検出面を基準にすると西側肩部から29次対象地東端までの距離は最大で東西7.6m、深さが最大2.1mである。北に対してやや東へ振っている可能性がある。江戸時代に作成された浜松城の絵図に表現された下垂口北側の堀と捉えられる。なお、29次調査対象地のうち、堀跡より西側の地区は近代以降の地形改変によって遺構・遺物は失われていると判断できる。対象地西側隣接地との高低差が大きく、調査対象地西側は現在よりも地盤が高かったと想定できる。

## 5 調査の方法と経過

**調査区の設定** 29次調査により遺跡が確認された範囲のうち、開発行為により保護が図れない地点を対象として本発掘調査の調査区を設定した。北側の調査区を調査区1（58㎡）、南側の調査区を調査区2（190㎡）とした。

**現地調査** 現地調査は令和2年（2020）9月1日から令和2年9月23日にかけて調査区毎に現地調査を実施した。掘削深度が深いため、調査前に調査区外周に土留め工事を施し、安全を確保した上で調査に着手した。記録の作成はトータルステーションを用いて実施した。

**写真撮影** 写真撮影はフィルムカメラと35mmフルサイズセンサー搭載のデジタル一眼レフカメラを併用した。

**整理作業** 調査終了後、浜松市北区引佐町井伊谷に所在する浜松市地域遺産センターにて整理作業を実施した。なお、出土した木製品と漆器の樹種同定や漆塗膜構造の分析、保存処理は株式会社吉田生物研究所が実施した。

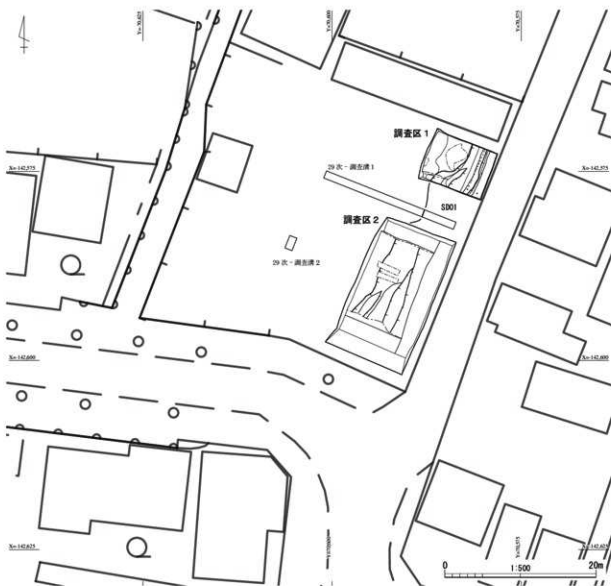


Fig.9 40次調査区の配置

## 第2章 調査成果

### 1 40次調査の概要

令和元年（2019）10月28日に実施した29次調査成果をもとに開発事業者と協議を行い、遺跡の保護が図れない箇所を対象として発掘調査を実施した。調査区は保存可能部分を挟んで南北の2つに分かれたため、北側を調査区1、南側を調査区2とした。発掘調査は調査の工程上、調査区2を先行して実施した。調査区2の表土掘削を令和2年（2020）9月1日から実施し、堀の検出作業を9月2日から11日にかけて実施した。完掘後は、埋め戻しは流用土を用いて埋め戻したのちに、調査区1の表土掘削を9月16日に行い、堀跡の埋土を人力で掘削し、9月23日に調査を完了した。

### 2 基本層位

**基本層位の概要** 対象地の土層は調査区2の北壁と南壁で確認をした。基本層序はI層の表土層とV層の基盤層である。堀跡の検出面は基盤層（V層）直上である。II～IV層は堀跡の埋土である。II～IV層の堆積状況については、検出遺構にて触れる。

**I 層** I層は暗褐色土を主体とした表土層である。

**V 層** 基盤層は、黄褐色系の粘質土が上位層に見られ、下位層では黄褐色系の砂や砂礫がみられる。特徴により細分が可能である。

### 3 検出遺構

#### （1）堀跡（SD01）

29次調査の結果から想定された位置で南北方向へと続く堀跡（SD01）を検出した。調査区1・2ともに堀跡の西側肩部から堀底部分を検出したが、東側の肩部は調査区外にあり未検出である。SD01は検出位置や規模、時期から近世浜松城の東外堀と捉えられる。

**検出状況** SD01の検出面は基盤層直上である。肩部は近代以降の地形改変により近世浜松城の段階よりも低い。調査区1で検出したSD01は検出面を基準にすると幅が北側で3.5m、南側で7.0m、深さが1.2mである。調査区2で検出したSD01は検出面を基準にすると幅が北側で7.4m、南側で10.0m、深さが2.7mである。南から北に向けて肩部が東へと振れていることが明らかになった。SD01の西側斜面は約30度と緩やかな部分や階段状になっている部分が多くみられる。基盤層が砂質で崩れやすい性質であることが一因とみられる。

**SD01埋土の概要** SD01埋土は、近代におけるSD01の埋め立て土（II層）、戦国時代後半から近世を中心とした時期の自然堆積土等（III層）、戦国時代の自然堆積土等（IV層）に分けて捉えることが可能である。III層とIV層では明確な堆積の断絶と土層の前後関係が認められ、浸濫や改築の可能性がうかがえる。

**II 層** 褐色系の粘質土や砂質土が主体である。基盤層由来の土砂と捉えられる。堀跡西側には曲輪があったことが絵図からうかがえるが、全く遺構や遺物が確認できず、すでに基盤層が大きく削平されていることが明らかである。廃城後、堀を埋め立てる際に曲輪を削平して堀を埋め立てた

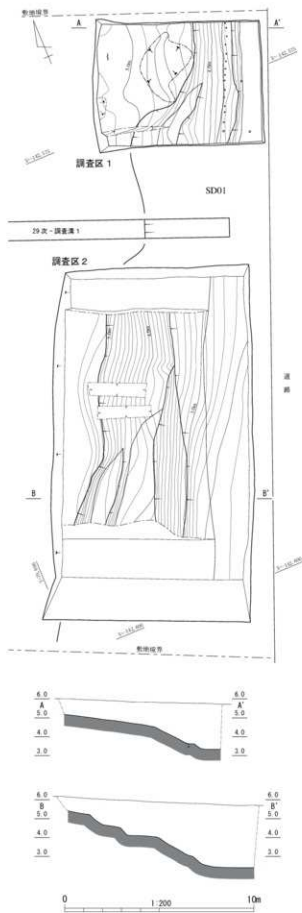


Fig.10 検出遺構

とみられる。

**Ⅲ層** Ⅲ層は、SD01の自然堆積土と捉えられる灰色系の粘土と、SD01西側斜面の崩落土と捉えられる礫を多く含む暗褐色粘質土が認識できる。Ⅲ層(南壁4層)の上面がSD01の廃絶時期を示す。Ⅲ層の下端は標高3.0m付近であり、検出面からの深さは約2mである。

**Ⅳ層** Ⅳ層はSD01の自然堆積土と捉えられる灰色系粘土(南壁22層～24層)と、SD01西側斜面の崩落土や初期流入土と捉えられる褐色砂礫や灰黄色砂礫(南壁25層～30層)である。

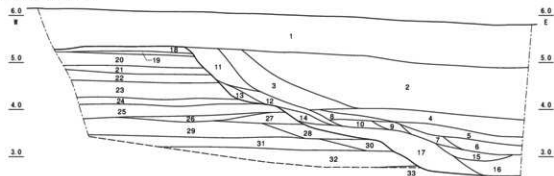
Ⅳ層下層では湧水が顕著であることや、灰色粘土の堆積が顕著なことからSD01は水堀であったと捉えられる。

**遺物の出土状況** 曲物や漆器は調査区2のⅣ層灰色粘土中(23・24層)から出土した。また、播鉢(14)は調査区1のⅢ層中から出土した。そのほかの土器・陶器類は、いずれも小片であり、堀跡西側の曲輪から流入したものと捉えられる。

## (2) 堀跡内木杭列(SX01)

調査区1のSD01底部付近において木杭列(SX01)を検出した。SD01西側斜面の立ち上がり部分に直径約5cm程度の木杭が南北方向へ15本並んだ状態で検出したものと、堀底中心部に近い位置において直径8cm程度の木杭2本を検出したものがある。なお、SX01とその周辺において他の木材の出土はみられなかった。検出した木杭は、地中に埋もれた先端部が尖るように加工されており、掘方が認められないことから、打設もしくは差し込まれたものと捉えられる。検出面から埋没した木杭の先端までの長さは約20cmである。木杭の上部が失われている。堀跡西側斜面の基盤層は崩れやすい特徴もつ土質であり、斜面の傾斜が30度、もしくは階段状であることを踏まえると、SX01は、護岸の構造体のほか、柵・逆茂木・乱杭等の防御施設である可能性が想定できる。

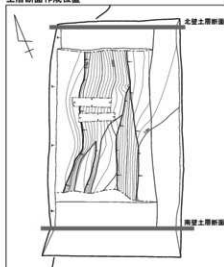
調査区 2 北壁土層断面図



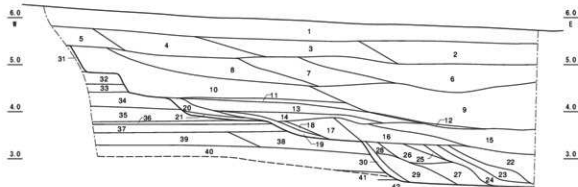
- I層【表土・造成土】**  
 1 埤褐色表土  
**II層【近代の埋埋の立て土】**  
 2 褐色砂質土と灰褐色砂質土の混層  
 3 埤褐色砂質土（礫含む）  
**III層【近代の埋埋土】**  
 4 埤青灰色粘質土  
 5 明灰色粘質土  
 6 灰色粘質土  
 7 埤緑灰色粘土  
 8 埤褐色粘質土（有機質）  
 9 明灰色粘土  
 10 埤緑灰色粘質土（礫含む）  
 11 埤褐色粘土  
 12 褐色粘土  
 13 灰黄色粘土  
**IV層【中世の埋埋土等堆積土】**  
 14 埤灰色粘土  
 15 埤緑灰色粘質土（礫含む）  
 16 埤灰色粘土  
 17 褐色粘土（初期流入土）

- V層【瓦組層】**  
 18 黄褐色砂質土  
 19 灰黄色砂礫  
 20 灰黄色砂質土  
 21 灰白色砂質土（礫含む）  
 22 灰白色砂質土  
 23 褐色砂礫  
 24 黄褐色砂質土  
 25 褐色砂礫  
 26 黄褐色砂質土  
 27 明灰色砂礫  
 28 明褐色砂礫  
 29 褐色砂礫  
 30 明褐色砂礫  
 31 褐色砂礫  
 32 明灰色砂礫  
 33 灰白色砂礫

土層断面作成位置



調査区 2 南壁土層断面図（反転）



- I層【表土・造成土】**  
 1 埤褐色土と黄褐色粘質土の混層  
**II層【近代の埋埋の立て土】**  
 2 褐色土（礫含む）  
 3 褐色土（礫少量含む）  
 4 褐色土（灰褐色土20%含む）  
 5 褐色粘質土（礫含む）  
 6 灰色粘質土  
 7 褐色粘質土（礫含む）  
 8 褐色粘質土と褐色粘土の混層（礫含む）  
 9 灰色粘質土（礫多く含む）  
 10 褐色粘質土（礫多く含む）

- III層【近代の埋埋土等堆積土】**  
 11 埤褐色粘質土  
 12 灰色粘土  
 13 灰黄色粘質土（礫含む）  
 14 埤褐色粘土  
 15 埤青灰色粘土（有機質）  
 16 灰色粘土  
 17 埤緑灰色粘質土（礫多く含む）  
 18 埤褐色砂質土  
 19 明灰色シルト  
 20 明灰色シルト  
 21 灰色粘質土

- IV層【中世の埋埋土等堆積土】**  
 22 灰色粘土  
 23 埤灰色粘土  
 24 灰色粘土  
 25 埤褐色砂礫  
 26 埤黄褐色砂礫  
 27 灰黄色砂礫  
 28 埤褐色砂礫  
 29 埤褐色砂礫  
 30 灰黄色砂礫

- V層【瓦組層】**  
 31 褐色砂礫  
 32 灰黄色砂質土  
 33 褐色砂礫  
 34 灰黄色砂質土と明褐色砂質土の互層  
 35 明褐色砂礫  
 36 明褐色粘質土  
 37 明褐色シルト  
 38 黄褐色砂礫  
 39 褐色砂礫  
 40 褐色砂礫  
 41 褐色砂質土  
 42 灰白色砂礫



Fig.11 SD01 土層断面図

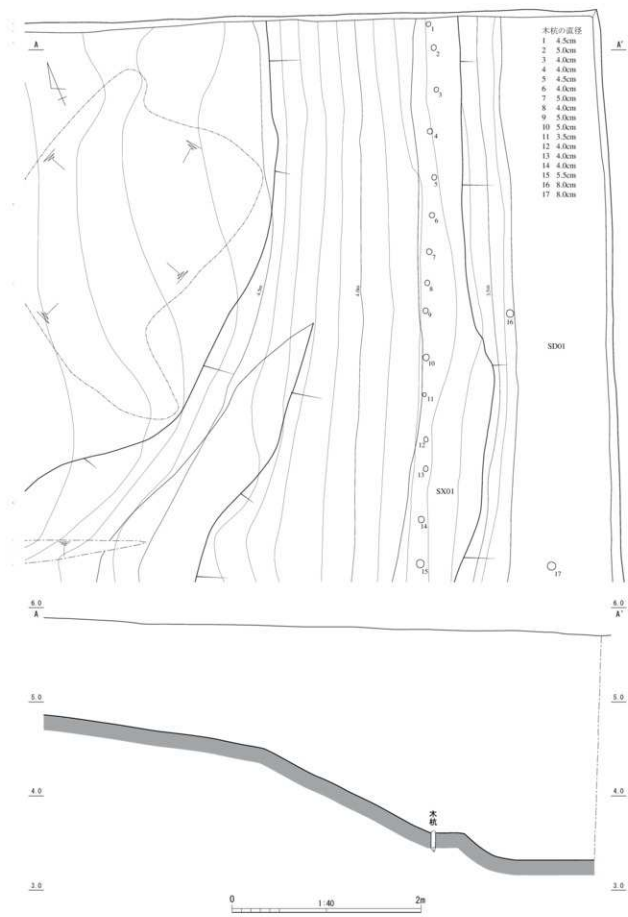


Fig.12 SX01の詳細



#### 4 出土遺物

40次調査の出土遺物は、戦国時代から江戸時代にかけての時期の土器・陶器類と木製品・漆製品が出土した。このうち、時期的な特徴を示し、図化可能なものをすべて抽出し掲載した。

**土師質土器** 土師質土器は内彎形口縁内耳鍋と羽付釜を図示した。8は内彎形口縁内耳鍋である。口径は23.2cmで、口縁端部はやや内傾した凹面を持つ。外面には多量のススが付着し、内面にはコゲが付着している。16世紀後半から17世紀代のものと捉えられる。9は羽根付釜で口径36.0cm、最大径が39.2cmである。端部には水平な面を持ち、内面はコゲ、外面にはススが付着する。

**陶器** 陶器は皿や播鉢、半胴、匣鉢が出土した。10は、初山窯産の丸皿もしくは稜皿の底部である。高台は削り出して成形され、高台径は4.4cmである。大窯4段階のものと捉えられる。11は、瀬戸美濃窯産の半胴である。江戸時代のものとして捉えられる。12は匣鉢で、残存部の最大径は16.5cmに復元できる。内面は明赤褐色、外面は自然釉が部分的に掛かり浅黄色に焼成されている。窯道具であるが、外面の摩耗が進んでおり転用品の可能性はある。13は瀬戸美濃窯産の播鉢である。底径は13.4cmである。外面は底部付近の釉薬が直線的に拭き取られている。内面及び底部外面は摩耗が顕著であり、内面の播り目や底部外面の調整痕跡は失われ胎土が露出している。大窯期のものと捉えられる。14は全形が復元できる瀬戸美濃産の播鉢である。内面から底部外面に至るまで鉄軸が施され、褐色に発色している。口径は25.6cm、底径は11.2cm、器高は8.4cmである。登窯第6小期のものと捉えられる。

**木製品** 木製品は、いずれも調査区2のSD01埋土23層・24層から出土したものである。いずれもヒノキが用いられている。15は曲物の側板で、ケガキは認められないが幅1.0cm程度の椴の樹皮を用いた綴皮がみられる。残存長21.8cm、幅2.2cm、厚さ0.8cmである。16は曲物の底板である。直径12.8cm、厚み0.8cmである。透明漆が破断面と内面にあたると推定できる面を中心に付着している。また、側面や裏面にも付着しているが、下地や重ね塗りが認められず、透明漆の付着範囲が斑であることから、漆製品ではなく、漆容器や工具等に転用された可能性がうかがえる。透明漆が多く付着した面に限り刃物によるとみられる鋭く細かい刻み目が無数に認められる。17は曲物の底板である。直径は20cmに復元でき、厚みは0.7cmである。片面には均質に柿渋が塗布されている。18は、曲物の底板とみられるが、中央に3つの小孔が一行に穿たれており、転用されたとみられる。直径11.3cm、厚み0.9cm、小孔の直径はいずれも0.4cm程度である。

**漆器** 漆器碗が3個体出土した。いずれの漆器も調査区2南側のSD01埋土23層もしくは24層から出土したものである。19の漆器碗は全形が復元でき、口径18.0cm、底径9.8cm、器高8.4cmである。素地にはクリ材が用いられている。内外面ともに下地に木炭粉を混ぜた柿渋を用い、その上に透明漆を塗布している。外面には朱を顔料に用いた赤漆で鶴が描かれている。内面は朱を顔料に用いた赤漆塗である。20の漆器碗は底部から口縁部下半が残存する。素地にはクリ材が用いられている。内外面ともに下地に木炭粉を混ぜた柿渋を用い、透明漆塗を主体としたものである。内面は透明漆を二層に分けて塗布している。いっぽう、外面には朱を顔料とした赤漆を用いて図柄が描かれているが、図柄の残存部位が少なく図柄の詳細は不明である。底径8.2cmである。21は漆器碗は、高台の付け根から底部付近が残存している。素地にはケヤキ材が用いられている。外面は下地及び漆塗膜ともに失われている。内面は木炭粉を混ぜた柿渋に透明漆が塗られ、朱を顔料とした赤漆が塗られている。

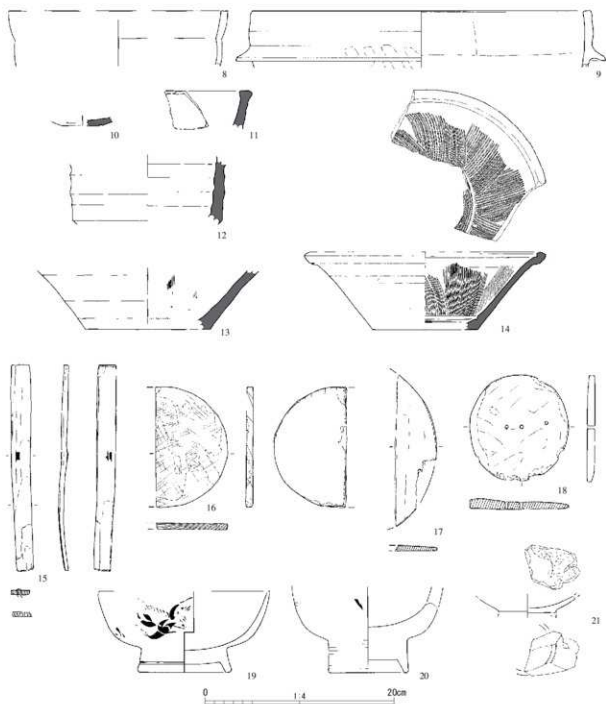


Fig.13 40次調査出土遺物

## 5 小 結

南北方向へと続く浜松城の東外堀と捉えられる SD01 を検出した。調査区 1 の北側では SD01 の検出幅が 3.5 m、調査区 2 の南壁では検出幅が 10.0 m であり、検出面からの深さは最大で 2.7 m である。SD01 西側斜面の裾部では木杭列 (SX01) を検出した。堀西側斜面の基盤層は崩れやすい土質で斜面は緩やかである。土留めもしくは、逆茂木等の防御設備の可能性が想定できる。SD01 の埋土から出土した遺物は、16 世紀から 17 世紀代にかけてのものが主体であり、18 世紀以降のものも少量ではあるが認められる。SD01 の上位埋土 (II 層) は基盤層と土質が類似する。II 層中における近代以降の遺物は極めて少なく、近代でも早い段階に埋め立てられたと捉えられる。

## 第3章 分析

### 1 分析の概要

浜松城跡 40 次調査において堀跡から木製品 4 点と漆器 4 点が出土した。このうち 2 点の漆器は、樹種同定及び漆塗膜構造調査、保存処理を経て接合することが明らかになった。樹種同定において報告する試料数は木製品 4 点と漆器 3 点の計 7 点である。また、漆塗膜調査で報告する試料数は、漆が付着した木製品 1 点と漆器 3 点の計 4 点である。なお、樹種同定及び漆塗膜構造調査は、株式会社吉田生物研究所が実施し、報告をもとに和田（浜松市文化財課）が加筆・再編集した。

### 2 出土木製品及び出土漆器の樹種同定

#### (1) 対象試料

分析を行った試料は浜松城跡 40 次調査によって出土した木製品 4 点と漆器 4 点である。このうち、漆器 19 は樹種同定及び保存処理後に試料 2 点が接合することが判明したため、本報告では木製品 4 点と漆器 3 点について樹種同定の結果を示す。

#### (2) 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。樹種同定に使用した顕微鏡は、Nikon DS-Fi1 である。

#### (3) 樹種同定の結果

**概要** 樹種同定結果、針葉樹 1 種（ヒノキ科ヒノキ属）と広葉樹 2 種（ブナ科クリ属クリ、ニレ科ケヤキ属ケヤキ）を確認した。試料毎に木口、柾目、板目の顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

**ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.)** ヒノキ科ヒノキ属は、木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 1～2 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。樹種同定の対象とした試料のうち、曲物側板及び底板（15～18）が、ヒノキ科ヒノキ属である。

**ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)** ブナ科クリ属クリは、環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（ $\sim 500 \mu\text{m}$ ）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは 2～3 個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。樹種同定の対象とした試料のうち、漆器（19・20）がブナ科クリ属クリである。

**ニレ科ケヤキ属ケヤキ (Zelkova serrata Makino)** ニレ科ケヤキ属ケヤキは、環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（ $\sim 270 \mu\text{m}$ ）が1列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1～3列のものとおおむね6～7細胞列のほぼ大きさの様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

#### (4) 小 結

40次調査において出土した木製品及び漆器は、樹種同定の結果、曲物にはヒノキ、漆器にはクリとケヤキが用いられていることが明らかになった。

#### 【参考文献】

- 林昭三 1991『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所  
 島地謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版  
 伊東隆夫 1999『日本産広葉樹材の解剖学的記載1～V』京都大学木質科学研究所  
 北村四郎・村田源 1979『原色日本植物図鑑木本編1・II』保育社  
 奈良国立文化財研究所 1985『奈良国立文化財研究所史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇』  
 奈良国立文化財研究所 1993『奈良国立文化財研究所史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇』

曲物側板(15) ヒノキ科 ヒノキ属

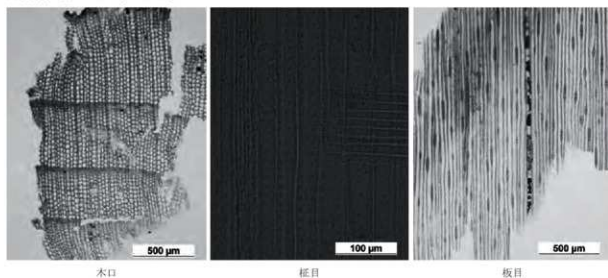
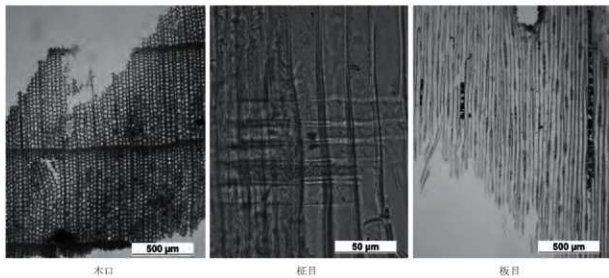
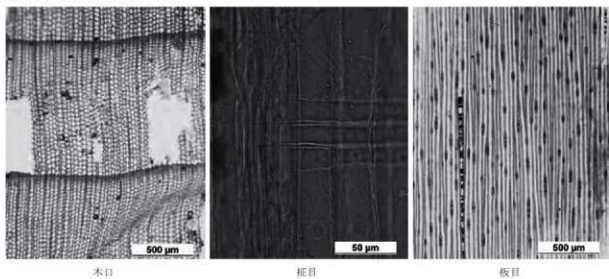


Fig.14 出土木製品の顕微鏡写真(1)

曲物底板 (16) ヒノキ科 ヒノキ属



曲物底板 (17) ヒノキ科 ヒノキ属



曲物底板 (18) ヒノキ科 ヒノキ属

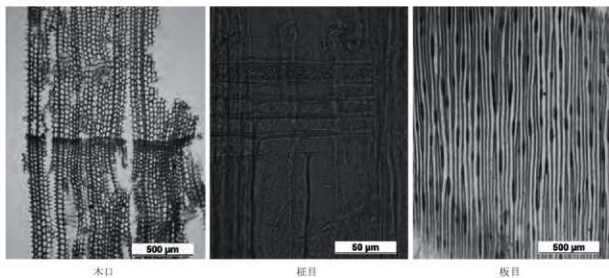
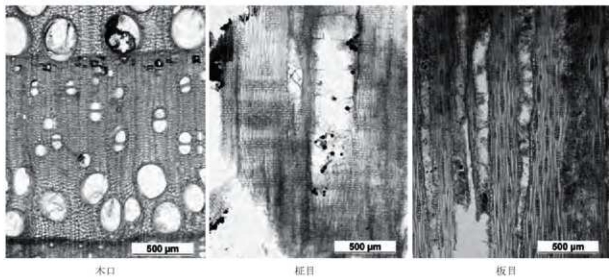
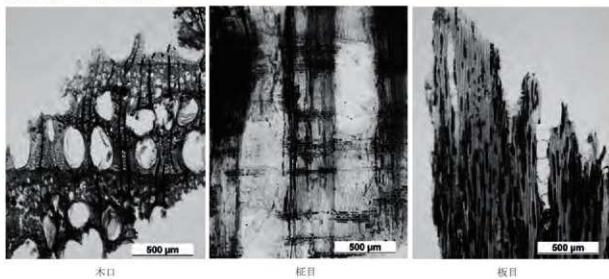


Fig.15 出土木製品の顕微鏡写真(2)

漆器柄 (19) ブナ科クリ属クリ



漆器柄 (20) ブナ科クリ属クリ



漆器柄 (21) ニレ科ケヤキ属ケヤキ

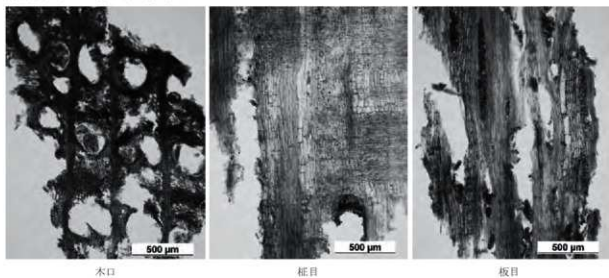


Fig.16 出土漆器の顕微鏡写真

### 3 漆塗膜構造の調査

#### (1) 対象資料

漆塗膜構造の調査を実施した資料は、堀跡埋土中から出土した近世の漆器碗4点と漆が付着した曲物の底板1点の合計5点である。このうち、漆器碗(19)は漆塗膜調査及び保存処理後に分析資料間で接合することが明らかになった。本報告では、接合した漆器碗を1点とし、漆器碗3点と漆が付着した曲物の底板1点の計4点の漆塗膜構造について報告する。

#### (2) 調査方法

資料本体の塗膜付着部分から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを射光ならびに透過光の下で検鏡した。

#### (3) 断面観察

塗膜断面の観察結果を、器種毎に示す。

**曲物底板** 素地の木胎に淡黄褐色の漆が染み込み、その上に透明漆が1層見られた。この透明漆層の上面は平滑ではなく凹凸が見られ、やや劣化した様子である。

**漆器碗** 漆器の塗膜構造は下層から、木胎、下地、漆層が観察された。下地は全点とも濃褐色を呈する柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地である。黒色部分は透明漆、赤色漆は地色・漆絵ともに明度が高く明確な粒子形状である朱の利用が認められた。

漆層は、黒色の地色の上に赤色で文様が描かれたもの(19・20外面)は、透明漆1層の上に文様部の赤色漆が1層みられた。赤色の地色のもの(19・21内面)は、透明漆1層の上に赤色漆が1層みられた。文様が描かれず黒色の地色のもの(20内面)は、透明漆が2層がみられた。

#### (4) 小 結

浜松城跡40次調査によりSD01から出土した漆器と漆が付着した曲物底板について漆塗膜構造の調査を実施した。曲物底板(16)内面には透明漆1層がみられた。意図的に塗布されたものとは判断できず、内容物が付着するなど副次的な要因によるものと判断できる。

素地がクリの漆器碗(19・20)は、素地の上に炭粉渋下地を施し、内面は透明漆を1層塗布した上に地色の漆(19:赤色漆、20:透明漆)を重ね、外面には地色の漆(透明漆)を塗布した上に赤色漆を用いて文様を描いている。赤色漆に混和された顔料は全て朱であった。

素地がケヤキの漆器碗(21)は、素地の上に炭粉渋下地を施し、その上に透明漆1層、地色の赤色漆を重ねている。ケヤキが素地の場合には炭粉渋下地ではなく漆下地が施される場合もあるが、今回調査した資料には炭粉渋下地が施されており、クリが素地の資料との相違点は認められない。

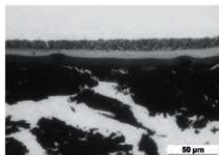


Fig.17 クリ素地の断面構造 (19内面)

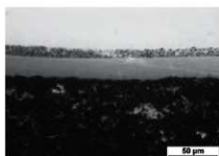


Fig.18 ケヤキ素地の断面構造 (21内面)

## 第4章 総括

**堀跡の規模・構造** 浜松城跡 40次調査において検出した堀跡（SD01）は、東側肩部が調査区外にあたるためSD01の幅は不明確だが、検出面を基準にすると検出幅10.0m、深さ2.7mと大型である。SD01の埋土は灰色粘土主体であることから、水堀であったと捉えられる。またSD01の埋土堆積状況から、浚渫もしくは改築が行われた可能性がうかがえる。出土遺物は数量が限られているが、16世紀後半から17世紀代を中心とし、18世紀代の遺物が少量みられることから戦国時代に築造され、江戸時代を通じて堀として機能したことが明らかである。40次調査において検出したSD01は、検出位置と検出規模から浜松城跡の下垂口北側に構築された堀と捉えられる。絵図では、中土手を持つ水堀が描かれることが多い。絵図の中には遠州浜松城図（浜松市博物館蔵）等、堀の幅を記載するものがあり、いずれも堀口は17間と表記されている。中土手を含んだ堀の幅は30m～34m程度であったと捉えられる。

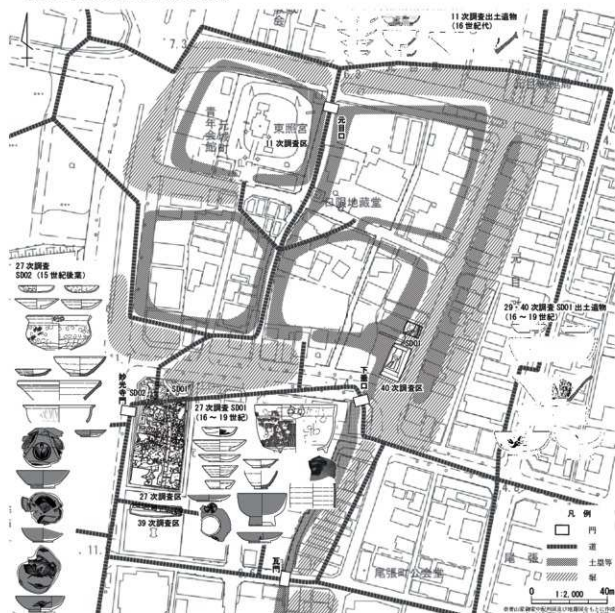


Fig.19 古城の調査成果



**漆器の特徴** 堀跡のうち堀底に近い部分から漆器椀が3点出土した。出土した漆器はいずれも、木炭粉を混ぜた柿渋を下地に用い、上に透明漆を塗布している。外面には朱を顔料とした赤色漆を用いた漆絵がみられ、内面は透明漆を重ね塗りするものと、朱を顔料とした赤色漆を塗るものが認められた。同一層位から出土した遺物の時期から漆器も16世紀代のもものと捉えられる。また、木製品の中には、漆が付着するものがみられ、40次調査対象地とその周辺において漆が扱われていたことがうかがえる。

**40次調査の意義** 浜松城東外堀とその周辺は、廃城後に埋め立てられ市街地化したため、絵図により存在が知られるのみであった。40次調査によって浜松城東外堀を検出し、浜松城の東端の位置が発掘調査成果をもって確定させることができるようになった。堀の築造時期は16世紀代と捉えられ、江戸時代に浚渫もしくは改築した可能性がうかがえる。浜松城の堀跡はいずれも近代以降に埋め立てられ、地表で観察できるものはないが、市街地の地中に埋もれている。今後、調査成果を蓄積し、引間城の時代を含め浜松城の構造と変遷を明らかにしていく必要がある。

#### 【参考文献】

- 静岡県 1930『静岡県史』第1巻(旧版)
- 向坂剛二 1976『浜松市動物園内左山横穴墳』『森町考古』10
- 浜松市博物館 1995『浜松城のイメージ』
- 浜松市教育委員会 1968『浜松城と浜松藩』
- 浜松市教育委員会 1984『浜松城天守曲輪周辺の発掘調査について』
- 浜松市教育委員会 1996『浜松市指定文化財 浜松城跡—考古学的調査の記録—』
- 財浜松市文化振興財団 2010『浜松城跡4次』
- 財浜松市文化振興財団 2011『浜松城跡5次』
- 財浜松市文化振興財団 2012a『浜松城跡6次』
- 財浜松市文化振興財団 2012b『浜松城跡7次』
- 浜松市教育委員会 2013a『浜松城跡8次』
- 浜松市教育委員会 2013b『浜松城跡9次』
- 浜松市教育委員会 2013c『平成23年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2014『平成24年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2015a『平成25年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2015b『浜松城跡10』
- 浜松市教育委員会 2016a『浜松城跡11』
- 浜松市教育委員会 2016b『浜松における中世城館の調査』
- 浜松市教育委員会 2016c『平成26年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2017『平成27年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2018a『浜松城跡12』
- 浜松市教育委員会 2018b『平成28年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2019『浜松城跡13』
- 浜松市教育委員会 2020a『平成30年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2020b『浜松城跡26次調査の概要』
- 浜松市教育委員会 2021a『令和元年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2021b『浜松城跡14』
- 浜松市教育委員会 2021c『浜松城跡35次調査の概要』
- 浜松市教育委員会 2022a『浜松城跡15』
- 浜松市教育委員会 2022b『令和2年度 浜松市文化財年報』
- 浜松市教育委員会 2022c『浜松城跡43次調査の概要』
- 加藤理文 1994『浜松城をめぐる諸問題』『地域と考古学』向坂剛二先生選葬記念論集 向坂剛二先生選葬記念論集刊行会
- 栗原雅也 2005『初山境』『陶磁器から見るあ静岡県の中世社会 資料集』発表要旨・論考編 菊川シンポジウム実行委員会
- 鈴木一有 2014『遠江における守護所と城下町の様子』『新・清州会議資料集』新・清州会議実行委員会
- 鈴木一有 2021『浜松城の歴史と都市形成の歩み』『区画整理』第64巻12号 公益社団法人街づくり区画整理協会
- 藤沢良祐 2007『総論』『愛知県史別編 窯業2 中世・近世瀬戸系』愛知県
- 和田達也 2021『浜松市南部地域における戦国時代以降のかわらけの変遷』『地域考古学Ⅱ』向坂剛二先生米寿記念論集 向坂剛二先生米寿記念論集刊行会

## 報告書抄録

書名（ふりがな）	浜松城跡 16（はままつじょうあと 16）							
編著者名	和田 達也							
編集・発行機関	浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (050) 3730-1391							
発行年月日	2022 年 3 月 18 日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浜松城跡	静岡県 浜松市中区 元目町	22131	1-04-14	34 度 42 分 43 秒	137 度 43 分 45 秒	2020 年 9 月 1 日 ～ 2020 年 9 月 23 日	248 m <sup>2</sup>	集合住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
浜松城跡	城 跡	戦国時代～ 江戸時代		堀 跡	土師質土器 陶 器 木製品 漆 器	浜松城の東外堀を確認		
要約								
<p>浜松城跡は、浜松市中区元城町とその周辺に所在する中近世城郭である。40 次調査では浜松城北東部にある下垂口北側の水堀を検出した。検出した堀跡は東側肩部は不明であるため幅は不明であるが、検出面からの深さは2.7mである。戦国時代から江戸時代にかけて機能したものとみられる。浜松城の構造と変遷を明らかにするうえで重要な調査成果である。</p>								

## 浜松城跡 16

2022 年 3 月 18 日

---

編集・発行機関 浜松市教育委員会  
（浜松市市民部文化財課が補助執行）  
印 刷 中部印刷株式会社

---



40次調査区2 全景（北東から）



1 調査区1 完掘状況 (南西から)



2 調査区1 完掘状況 (北西から)



3 調査区1 木杭列 (SX01) 検出状況 (南東から)



4 調査区2 完掘状況 (北西から)



1 調査区2 完掘状況（南東から）



2 調査区2 SD01 南壁土層堆積状況（北北東から）



主要出土遺物



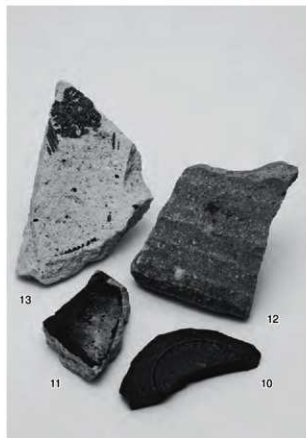
主要出土木製品・漆器



1 かわらけ



2 土師質土器



3 陶器・匣鉢



4 播鉢 (14)



5 平瓦 (7)

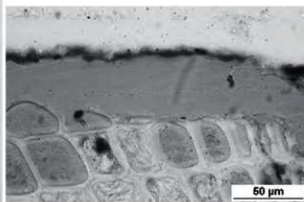




1 曲物側板 (15)・曲物底板 (16)



2 曲物底板 (16) 加工痕跡



3 曲物底板 (16) 内面漆塗膜構造



4 曲物底板 (17)

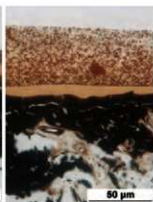


5 曲物底板 (18)



1 漆器碗 (19)

3 漆器碗 (20)



2 漆器碗 (19) 漆塗膜構造

4 漆器碗 (20) 漆塗膜構造



# Hamamatsu Castle

The 40<sup>th</sup> Excavation report

A Report of Archaeological Investigation  
on 16<sup>th</sup>-19<sup>th</sup> Century Castle in Western Shizuoka Prefecture, Japan



March 2022

Hamamatsu Municipal Board of Education